

第5節 浮遊粉じん（SP）

SPは、大気中に浮遊する微細な粒子の総称であり、主に未燃性の炭素（スス）を始め、硫酸ミスト、重金属等を含む。

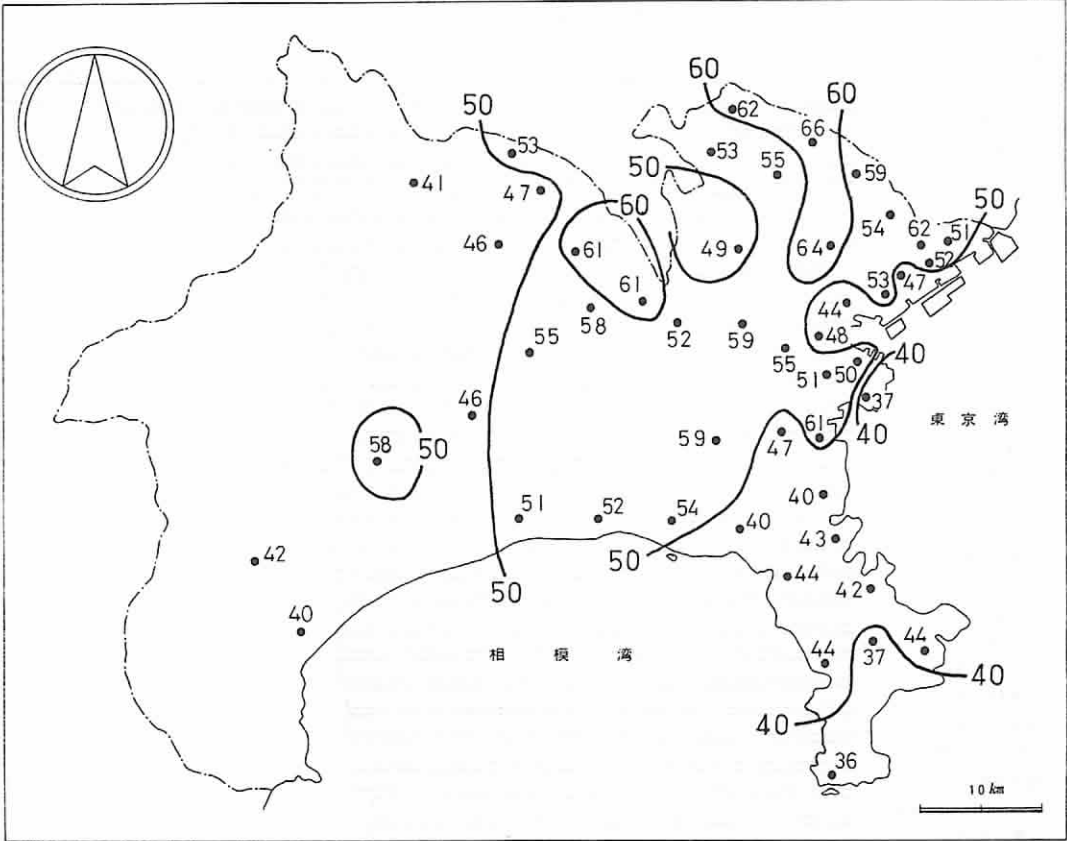
大気中のSPは、主として石油・石炭等の燃焼に伴って発生するものと、土石等のたい積場、セメント工場及び枝庭、荒地、道路等からの土塵の舞い上りによるものが発生源である。

本県のSP濃度は、51年度以降約 $0.050\text{mg}/\text{m}^3$ のはほ横ばい状態で推移している。

なお、SPに関しては汚染寄与率を含めた発生源の調査結果がとぼしいため、今後各種の汚染源や発生機構については、種々の調査を行い、環境濃度と発生源の関係を究明していく必要がある。

1. SP 濃度の地域分布 (年平均値, $\times 10^{-3} \text{ mg/m}^3$)

(56年度)

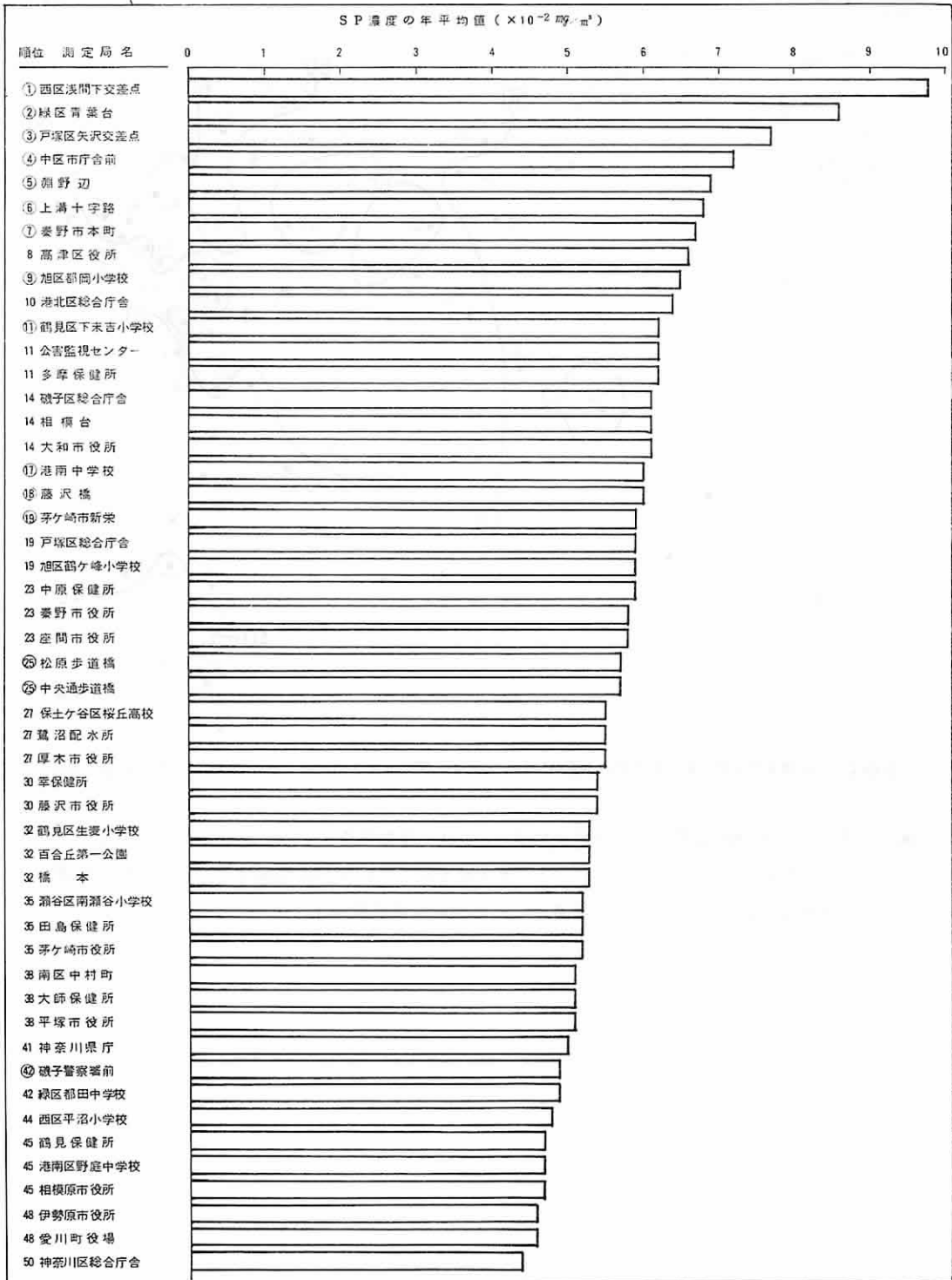


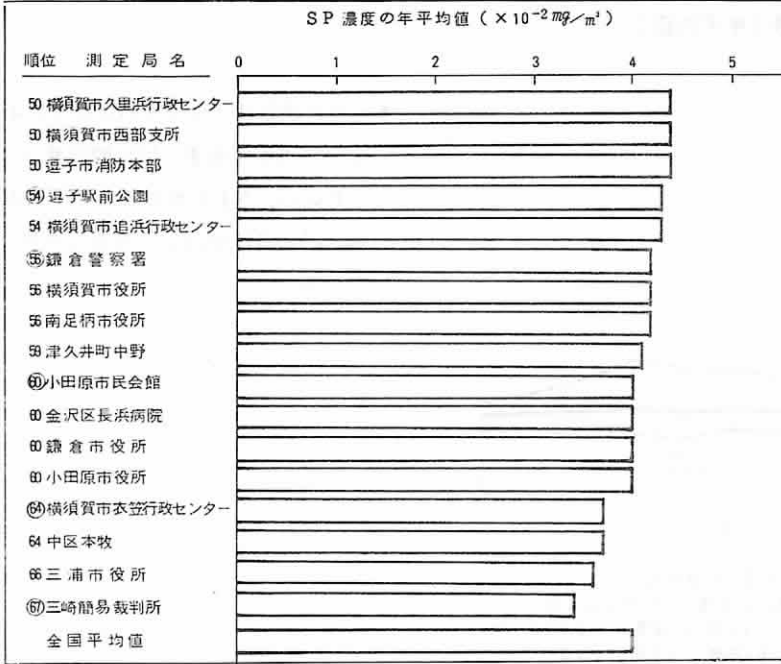
数値は、一般環境測定局におけるSPの測定時間数が6,000時間以上ある測定局(有効測定局)の年平均値である。

- ▲ 年平均値 0.050 mg/m^3 を超える高濃度地域は、京浜工業地帯を中心としているが、内陸部の大和市、相模原市でも存在している。全県的には三浦半島を除く県の東部が高濃度で、県の西部で低濃度であり、国道1号、16号、246号に隣接した測定局で高濃度を示している。

2. SP 濃度の局別順位 (年平均値)

(56年度)





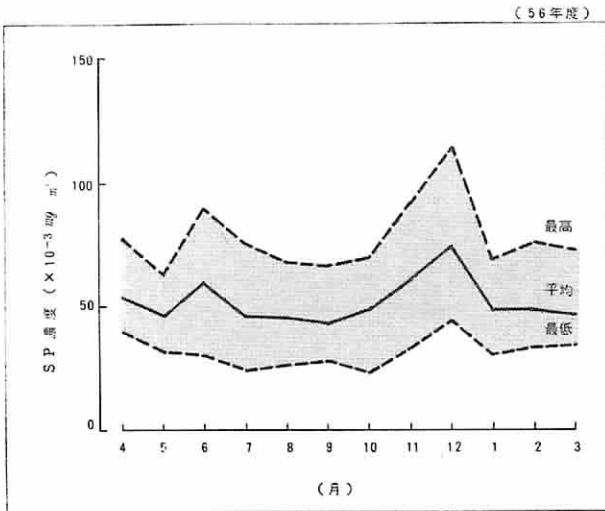
◀ SP 濃度の年平均値は、高濃度上位10局中8局が自動車排出ガス測定局であることから明らかなとおり、自動車排出ガスの影響を強く受けている。

年平均値の最高は、横浜市西区浅間下交差点の $0.098 \text{mg}/\text{m}^3$ であり、最低は三崎簡易裁判所の $0.034 \text{mg}/\text{m}^3$ である。

全国の一般環境測定局の全局平均値と比較すると、本県の年平均値は、59局が全国平均値 ($0.040 \text{mg}/\text{m}^3$) を超えている。

順位の○印は、自動車排出ガス測定局であることを示す。

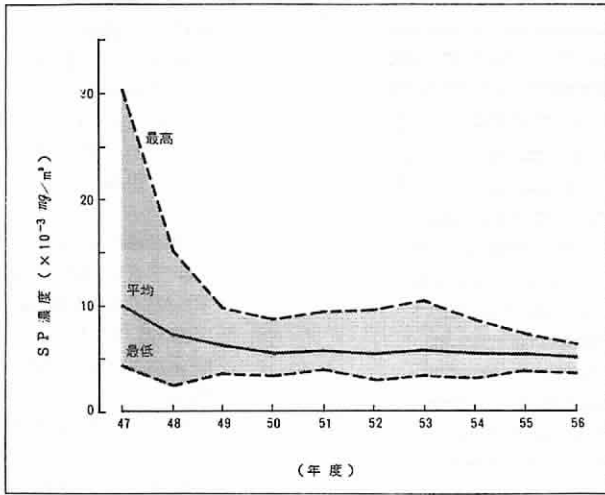
3. SP 濃度の年変化 (月平均値)



◀ 大気中のSP濃度は、全測定局の月平均値によれば、ほぼ夏期に低く、冬期に高い傾向を示している。

SP の測定時間数が、年間 6,000 時間以上ある測定局の月平均値から求めた。

4. SP 濃度の年度別推移 (年平均値)



◀ SP 濃度は、全局平均値が 47 年度から 50 年度までは比較的減少したものの、51 年度以降は約 0.050 mg/m^3 のほぼ横ばいの状況で推移している。

各年度の有効測定局の年平均値から求めた。
 各年度の有効測定局は、37局(47年度)、57局(48年度)、62局(49年度)、63局(50年度)、62局(51年度)、58局(52年度)、61局(53年度)、63局(54年度)、65局(55年度)、67局(56年度)である。